

疫学情報 2016年6月8日

<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000125960.html>

<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10807000-Iseikyoku-Keizaika/0000125967.pdf>

国民が受ける医療の質の向上のための医療機器の研究開発及び普及の促進に関する基本計画

閣議決定 平成28年5月31日

- 1 先進的な医療機器の研究開発の促進
- 2 医療機器開発関係者の従前の枠組みを超えた連携協力に関する措置
- 3 医療機器の迅速な承認体制及び適正使用等の確保
- 4 医療機器の輸出等の促進と国際協力及び展開等
- 5 その他の重要課題（医療機器の研究開発及び普及の促進に関する施策を総合的かつ計画的に推進するために必要な事項）

基本計画の基本方針として、次の1)～4)を目指すこととする。

- 1) 医療機器関連事業者、大学その他の研究機関及び医師その他の医療関係者の連携の強化等により、我が国の高度な技術を活用し、かつ、我が国の医療現場における需要にきめ細かく対応した先進的な医療機器が創出されるようにすること。
- 2) 医療機器の開発及び実用化を支援するために、次世代医療機器開発推進協議会による内閣官房、文部科学省、厚生労働省、経済産業省等の各省間の連携強化を引き続き図るとともに、医療機器開発支援ネットワーク等の基盤を生かし、医療機器開発に携わる、製造・販売、研究、医療に携わる者、地方自治体等の連携強化を進めること。
- 3) 医薬品医療機器法を医療機器の特性を踏まえて円滑に運用するとともに、実用化を見据えた医療機器開発が進むよう支援を行うこと。
- 4) 日本国内のみならず、国際協力を図りつつ医療機器の輸出等国際的な事業展開を促進するための環境を整備すること。

<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10906000-Kenkoukyoku->

[Kekkakukansenshouka/0000126084.pdf](http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10906000-Kenkoukyoku-Kekkakukansenshouka/0000126084.pdf)

事務連絡 平成28年5月31日

内閣官房国際感染症対策調整室

厚生労働省健康局結核感染症課

「夏の蚊対策国民運動」における蚊の対策に関する協力依頼について

<http://www.gov-online.go.jp/useful/article/201605/2.html>

<政府広報オンライン>

何が危ない？ どう防ぐ？ ジカウイルス感染症（ジカ熱）予防のポイント

○H5亜型判定30分 鳥インフルで麻布大が開発（日本農業新聞）

[http://www.agrinews.co.jp/modules/pico/index.php?content\\_id=37740](http://www.agrinews.co.jp/modules/pico/index.php?content_id=37740)

米国における髄膜炎菌による尿道炎 (CDC MMWR 6/3)

[http://www.cdc.gov/mmwr/volumes/65/wr/mm6521a5.htm?s\\_cid=mm6521a5\\_e](http://www.cdc.gov/mmwr/volumes/65/wr/mm6521a5.htm?s_cid=mm6521a5_e)

髄膜炎菌による泌尿生殖器感染症は、淋菌によって引き起こされる感染症よりも少ないが、尿道炎、子宮頸管炎、直腸炎、および骨盤内炎症性疾患の原因となります。

髄膜炎菌は、グラム染色（グラム陰性細胞内双球菌）では淋菌と同様に染色されません。髄膜炎菌は、鼻咽頭に定着するので、オーラルセックス（フェラチオ）を受ける男性は、髄膜炎菌性尿道炎を発症することがあります。このレポートでは、髄膜炎菌の増加はコロンバス、オハイオ州、およびオークランド郡、ミシガン州の性的健康クリニックに通う男性の尿道炎の報告です。

尿道炎由来の髄膜炎菌52株をコロンバスから、オークランド郡から12株の髄膜炎菌を、遺伝子解析のためCDCに送付しました。コロンバス由来のすべての分離株は、血清型スライド凝集反応およびPCR型別は血清型別不能でした。遺伝子タイピングは、すべての分離株は、ST-11とCC-11/ ET-37クローン複合体の一部でありました。12株のオークランド郡由来株のうち11株は、コロンバス株と同一の遺伝子型を示しました。（日本でも髄膜炎菌による尿道炎の症例報告はあります。）

<http://mainichi.jp/articles/20160508/ddm/016/040/014000c>

**感染症ならない・負けない・広げない**（毎日新聞2016年5月8日 東京朝刊）

大切、四つの予防策（国立国際医療研究センター感染症対策専門職・堀成美）

男性用コンドームの予防効果

私は看護師ですが、今の職場では「感染症対策専門職」の肩書で仕事をしています。病院は病気の人をケアする場所ですが、感染症の問題が起きないようにすることや、感染症対策を知りたい人・組織・地域を支援することも重要で、私の仕事の一つはそうした情報の収集と発信です。

感染症予防の仕事を目指したきっかけは、性感染症の患者さんたちから「病名は聞いたことがあったけれど、何が危ないのか、どうすれば防げるのかを教えてもらっていない」という話を何度も聞いたことです。日常生活で予防の工夫ができるのに、残念な話です。

性感染症とその予防は、中学校で学習することになっています。でも実際には、学校や担当した先生によって内容にばらつきがあります。性交開始年齢はここ数年上がっているのに、中学生や高校生で「すぐに困る」人ばかりではないのですが、学校を卒業した後に正確な情報を教えてくれる人を見つけるのは簡単ではありません（英語だったら駅前の英会話教室で学び直しができますが……）。リスクと回避法、それでも事故が起きたらどうするのかを学べば、慎重になったり準備を整えたりできる。支援の軸はここにあります。

性感染症はさまざまな種類がありますが、基本的に皮膚や粘膜、体液が密に触れ合うことで感染します。予防策は四つあります。

まず「延期」。例えばデートの際にコンドームを忘れてしまった時は、次の機会にする。お互いを思いやれるかどうか、です。二つ目は直接触れないようにする

「バリアー法」。日本で入手できるのは一般的に男性用コンドームですが、面積の限界があるため、ヒトパピローマウイルス（HPV）、ヘルペス、梅毒などを完全に防ぐことはできません。また、着けるタイミングを間違えると予防にならないので注意しましょう（射精の前ではなく、接触する前に装着します）。三つ目は「ワクチン」。B型肝炎ウイルスやHPVについては、医療機関で相談できます。最後は「検査と治療」。一部の検査は保健所などで無料・匿名で受けられます。

コンドームだけでは100%の予防ができない▽オーラルセックスでの感染予防をどうするか▽症状がなくても感染している可能性がある――といったことも前提に、対策を考える必要があります。

学生さんには保健所の保健師や大学の保健管理センターのスタッフに相談し、勉強会を開くことも提案しています。